

第5回：伝統型と未来型：2つの水利組織と日本

土地改良区は1948年の土地改良法にもとづいて整備されてきた日本の農民水利組織である。昨年夏イラク向け第三国研修におけるイラク人の日本での国内研修ではこの土地改良区に関する講義と見学に同行する機会をえた。JICA 筑波国際センターでの講義ののち新潟県亀田郷土地改良区への見学旅行が実施された。世界で成功をおさめた水利組織として評価されている土地改良区に対するイラク人研修員の関心は高く、法律整備、水管理、組織体制の運用から歴史にいたる担当者の説明に熱心に聞きいていた。研修員たちはユーフラテス川からの導水による灌漑施設の再建と水利組合の形成を最大の使命としており、その関心は具体的かつ実務的で日本から何がしかのヒントを得ようとしており、研修に対する意欲と切実さを感じた。講義でも活発な質疑応答がかわされていた。水田稲作を基盤に形成されてきた日本の水利組織は江戸時代以前から連綿と存続してきたムラという伝統集落を共同利水単位となるなかで形成されてきており、イラクに対する直接的応用は難しいという講義者の指摘に対し、食いさがって一つでも二つでも何かを取りこもうとする姿は印象的であった。乾燥地における水のもつ意味は湿潤環境での灌漑の考え方とは隔たりがあるのは自明であろう。しかし研修員のどん欲な姿勢をみていると日本から遠くはなれたイラクの地においても日本の伝統的水利組織である土地改良区の経験が十分生かされる余地があると感じられた。

さて、シリア国節水灌漑計画（技術協力プロジェクト）の一環として実施されたC/P国内研修においても土地改良区の見学（宮古島の地下ダム）が組みこまれていた。シリア人C/Pたちにとっても水利組織は関心の高いトピックであり、その見学はたいへん印象に残る研修のひとつとなったようであった。シリアでは、1960年代にはユーフラテス川流域をはじめ、全国で大小350をこす水利組織が存在していたとされている。イラク同様シリアにおいても、伝統的水利組織は、公共水である河川、泉、カナートなどの分配の場面において発達してきた。C/Pの目は第一にこれらの伝統的水利組織における近代灌漑の導入に向けられていた。しかし、さらに注目されるのは、C/Pは井戸水、すなわち従来農民の個人水と考えられている地下水源についても、効率的共同管理方法として水利組織の適用が検討され始めていることであった。ここでは、先の公共的な共同水利用という前提で成立する一般的かつ伝統的な水利組織に対して、そもそも個人所有とみなされる井戸水の統合的共同利用化を推進する過程における新しいタイプの水利組織が構想されていることになる。

シリアでは水資源の枯渇化が懸念され、需給が逼迫してきている。したがって最大の利水セクターであり総利水量の90%ちかくを占める農業分野における節水灌漑の重要性が叫ばれている。特にその6割は個人井戸による地下からの揚水とされており、その喫緊の対策が求められている。問題は、これらの井戸の大半が違法に掘削されており、1980年代半ば以降の井戸数急増による過剰揚水で深刻な地下水位の低下を招いてしまっていることである。これらの違法井戸を野放しにしておくわけにはいかないであろう。それゆえシリアでは井戸の統合化をすすめる違法井戸数を削減すると同時に、水の効率利用を最終目標に近代灌漑機器の導入、ひいては節水グループ化をはかる方策が議論されている。しかし、井戸の統合化、農民のグループ化は口で言うほど簡単ではない。農地面積が大きければ大きいほど、また井戸間の距離が離れば離れるほどその困難性は増す。たとえ技術面で解決されても初期投資や運用のコスト面でもなりたつかどうかという検討も必要である。他方農民の社会面からみた条件はどうかなどまだまだシリア側の調査は十分とは言いがたい。さらに個人井戸の共同化をすすめるためには個人水から共同水という農民たちの認識変化が醸成されることが不可欠であろう。このようにシリアで構想されるグループ化井戸による水利組織の形成には伝統的な水利組織の発想と異なる考え方が求められる。グループ化について十分な法整備がおこなわれていないことは言をまたない。こうした状況下で未来型とでもいうべき水利組織のアイデアを荒唐無稽なものとして鼻から拒絶してしまうのか。それともいくらかの可能性を模索していくのか。効果的な支援とは。いずれにせよ、多角的検討および再考は必要であると感じている。



水利図を前に議論するイラク人研修員たち
(筑波国際センター)



日本研修中のシリア人C/P
(宮古島土地改良区、ファームポンドにて)